

溪 穂



No. 18

1969年8月

浦和溪穂山岳会

渓 稜

No. 18

たくさんの人々が 夏の北アルプスに山がけるが あれはいさゝか厭味にたえない。こいつのは
その一部の人々 罪もない宿泊の首としめたとか、小屋のこじこまざれに 他人のピッケルを踏
んつけたとかいふ そんな末梢的な理由からではない。

登山の目的か 古くは修験道であり、近くは山脈録であるならば、万年雪のある ピールもあ
るアルプスへ夏山かけるなどは 本末転倒も甚だしい道筋行為でなくて何であろう。

厳冬のアルプスへ向うに同じく 夏は峠されるよつた、行て目かくらみ 強の花かぼやけるよつ
た、猛烈な設山へ登ることこそ、正流登山道であるんではなかろうかと考えたのである。

やたらような裏表に、こんな古きい山登りをする「豪娘う虫」が 少しは憤んでいたにこじま反
えなかろう、どうや。

—— 川崎精雄「雪山・設山」より ——

を思いつき、藤のつるを取って来て、その松の木に墨季をしばりつけてしまった。田が策めた墨季は白消りしません、「松藤絕えよ」と言つたので、以後武甲山には松と藤とは生えないといふ。言わば片や茲の國の典型のは善玉の試持と、片や相模國の悪玉武持の対立に、兎と龜の話をまで合はせたようほ伝説である。誠感風土記には、表参道の山中に神代文字があるこ書かれているが、恐らく石灰岩の割れ目を文字と見誤ったのであろう。神代文字を考察した平田篤胤が生前にこれを調査して、いたる面にあつてゐるが、瑞牆山のカシマノホロシと稱するのもこの類であろうが、これについては大鳥亮吉氏「登高者」の瑞牆山の編に述へられてゐる。

同じ石灰岩の明星山に較べると岩場のスケールは異なるか、小規模ながらも幕岩、屏風岩、障子岩、三ツ岩、コブ岩等が登攀り対象になつてゐる。このうち洞穴はオーバーハングを有する幕岩は昭和40年8月秩父登学会が初登した後、翌月9月本庄山の会が第二登、本会の清水・吉野パークも完登している。

屏風岩・樟子岩附近は数年前までは毎年事故者を出していにか、現在は秩父石灰の採掘が眞み登攀禁止にはなっている。

空峰（飯盛平）の横に少し盛り上り所があり、飯盛山と呼ばれている。西参道を橋丘寺に下り始める所と数分マブを越えて飯盛山へ出られる、西参道を橋丘寺に下り始める所と数分マブを越えて飯盛山へ出られるが、此處の展望は思った程ではなく、せいぜいコブ岩の偵察に良い値である。

沢のコースも大蛇沢・大戻沢・大棚沢・三ツ岩沢・カラ松沢等いくつかあるが、安全で風変りなコースに豆棚沢がある。一体に武甲山ても丸戻りである、この豆棚沢は裏参道すぐ右にある渓流で、下の丸山を過

さて杉林の奥さる辺を石に入れて取りつくじよい。こゝから四十分しかかかりず、近くの三ツ岩の跡部に振りかかる。下の方は泥のまじつにゴトゴトて、上の方は滑状にはつてゐる。その石の通り途中一トニキの豆棚が二、三あるのみで、元の水場（現在は木は涸れていら）を五分位行く所にある約八糺のテラスの多い棚が最もものである。この棚は直登でありますか、右岸を捲くと滑の傾斜も増し、更に二メートルの棚を越える二小樽に似た約三メートルの岩が右岸に現れる。ツメのサレが見えたらマブを過ぎ、右岸に迷子で岩を伝わる三ツ岩の三岩の上に出る。休日には隣りの二ノ岩で岩登りの練習をする人が見られる。下りは二ノ岩ヒミツノ岩の周を丸戻り沿いに十分も下れば裏参道に飛び出し、更に五分程度で上ノ丸山に達する。

私は実家へ帰ることよく旧講中西参道を幕岩を眺めに行く。この道は

巻頭言 辻勝四郎

《記録》

◆八ヶ岳大同心左内壁正面ルート 岩國義雄 (1)

43年夏山合宿例会の記録 (5)

◦徒走隊 小野寺義喜・下村一也 佐藤清司

◦ハングルートトヨヨ津島ルート 木田 実

◦八峰6峰Aフェース正面ルート 長谷川元介

◦八峰6峰ラフニス 萩川鏡之

◦八峰6峰Cフェース 木田 清

◦源次門先ルート至谷峰へ 萩川鏡之

◦穗高屏風岩の記録

◦屏風岩東三段白ハングルート 岩國義雄 (10)

◦屏風岩東壁黒糸ルート 岩國義雄 (12)

◦屏風岩黒糸ルート - 黒糸張壁右岩稜右コントルート
- 8月1日ルート - Aフェースルート 萩川鏡之 (14)

◦北穂高連谷の記録

◦滝谷ツルム北カソテ 萩川鏡之 (14)

◦滝谷ガラス根根ピクアルランア 岩國義雄 (15)

◦南アルカサバットレス 牧野季雄 (16)

◦北アルカサバットレス中央部 萩川鏡之 (19)

◦谷川岳一の倉 ミルク 牧野季雄 (20)

◦武甲山幕岩 清水英男 (21)

◦一人の山旅問題 山縣昌彦 (24)

(今月の一人の山旅問題、卷頭より)
(入笠山スキー行、日光白根より奥千山歩道)

《研究》

武甲山 - この山と山筋 志川謙朗 (31)

《置物》 索めての岩 小野寺義喜 (9)

らんぶく入 吉川謙朗 (34)

高知市名玉報告 (35)

編集後記 (31)

会が発足して四、五年の頃、我々は、会の在り方について時折に論議を重ねた。それらの登録は会報10、11号にも見られるが、それは同時に、当時の会運営の一つの局面をのぞかせる談話である。によれば、

世に山岳会は至る所ほどの多い。そしてその開拓もまた混沌としているが、つい最近までこれらの大方に共通した特徴として、組織が個人に優先するしという考え方がある。たゞ、それは毎年、何人を募集し、その指導が組織活動の中で大きさは比肩きらむる一にいっては、従事員は町の山登り宿命でもあり、そのよう区別されしは登山の本質から距離した独立的はセラシ・ナリズムに詰びついで見ることがでてる。

高校生講師の山岳会として会は発足したのは、各人が基本的登山技術を教えるに加えて、比強力スムーズにクラウド活動を志し掲げようとした。勿論、会員全員がレベルアップをめざすのであるが、たゞ、その車も、走破力も、技術も実践的に行なうことを目指す。現在は、会員に見えて、登山技術者へ指導の面で制約される弊は、現状に止んでしまいかつた。言わば「個人が会に優先して、いた状況である」。

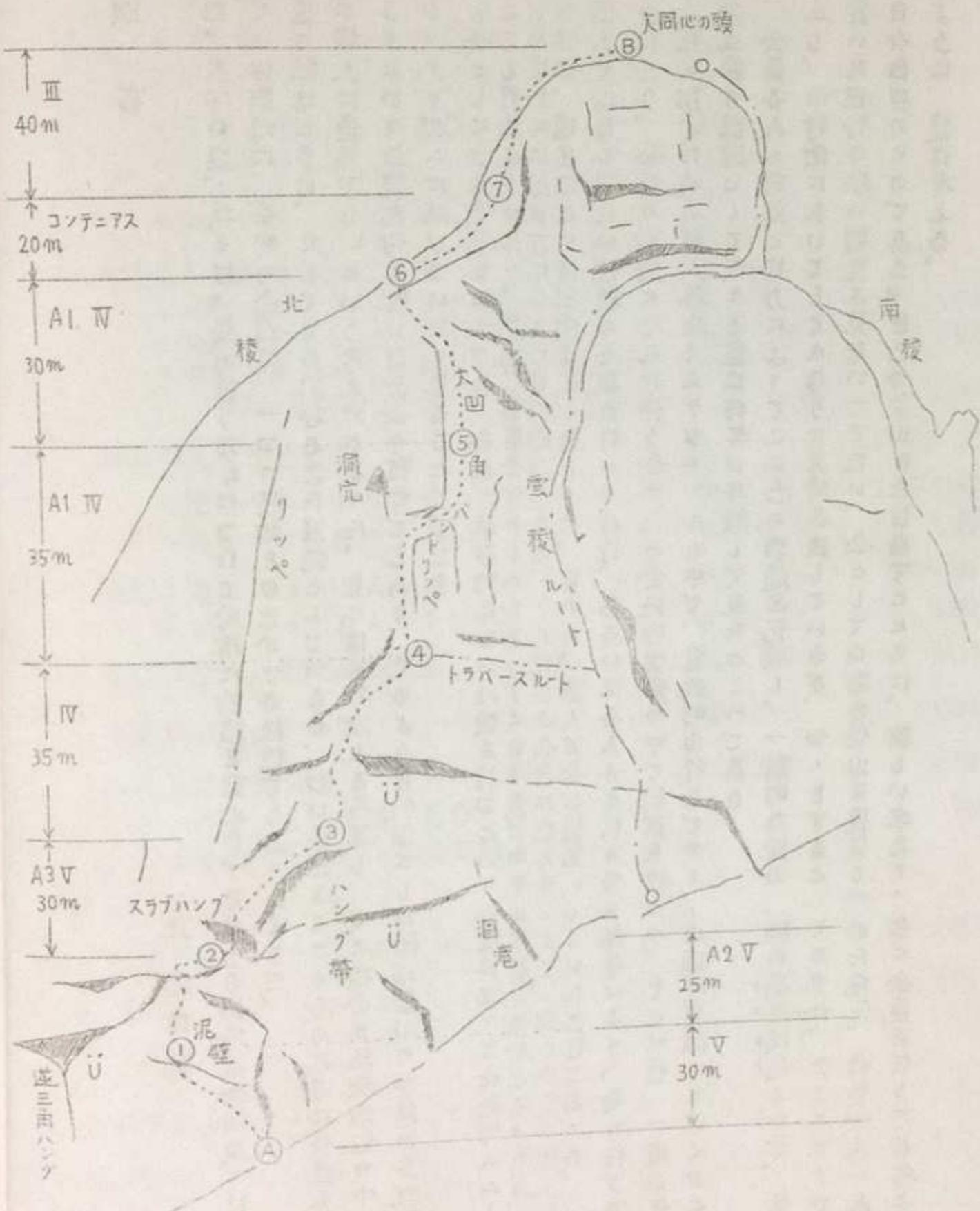
だが、やがて個人で行なう得ほい遠征の冬期山行への移行、あるいは各人のまわりの難化等により、「会の在り方」も論議されるにつになり、会員の増加とともに伴う会活動の全般的沈滞の中で転換を迫られ、それ以後、一般山岳会として会の動態変化を防ぐための新人養成のスケジュールの中で、意欲的山行をどのよに調整実践していくかといいうジレンマを、会運営の課題として我々も過去何年か経験して来たところである。

現在のところ、会員各人の理解と協力によってこれら難題を克服し、一般的な登山活動の高密度成長の中で、会員個々の技術も向上し、山行面においてもそれなりに実績を残しているが、や、もすると、その中に、テクニカルや知識にユニットを通じて視野の狭い観型を見ないでモード。会としての海外登山を模索し始めた現在、会員一人一人が登山への意欲が自分自身のものである。自己の立場を明確に目指すとともに、新しい次元での会と会員の在り方を考える時期に来ているように、僕は考える。

八ヶ岳大同心左岩壁大凹角ルート

—昭和42年3月～4月の記録 <Mem> 奥園義輝・塚越国雄

奥園義輝



会の春山合宿に便乗して、私と塚越も赤岳鉱泉のベースに入るため、三月二十日入山。その日は徒歩隊のテントに泊り、二人で大同心基部まで荷を上げておく。

連休のため壁にはいくつものバー

ティが鉢なりである。

二十一日、早目にテントを出る。基部までは一時間足らずで達する。荷を整理し、必要な道具だけを持ち、予定していく取付まで下る。取付は雲梯ルートより裏同心ルンゼへ七十米程下ったところである。

私が取付く。壁はほこんど雪をつけず、夏同様である。脆い壁を五分登り、左上へトラバースする。最初から極めて悪い登攀となり、小さなホールドにやっこしかみついているという感じである。それでも目標す外側バントに二時間費して着く。こ、でハーケンを二本打ってビルト。ニピット目は垂直の泥壁となり、トップを互いに交換しながら、ハ

ング下までハーケンハ本、ボルト一本を打ち込む。岩がやわらかいためシャンピングで穴をあけ、そこにハーケンを打つ。この苦しい作業である。ハングは私がトップになり、アイス・ロックハーケン各一本で越す。

ハングの上を右に曲木のトラバーで、ステップのハング下のビレイ尖につく。こ、にホルト。ハーケン各一本を打ってビレイ尖を作る。下から早くも四時になつたことを知り、早くも四時になつたことを知り、早くも四時になつたことを知り、

一本を打つてビレイ尖を作る。下から早くも四時になつたことを知り、早くも四時になつたことを知り、早くも四時になつたことを知り、

早くも四時になつたことを知り、

早くも四時になつたことを知り、

早くも四時になつたことを知り、

い基部まで残りの荷を上げる。彼には我々が壁に取り付いている間に雪洞を掘っておいてもらう。

塚越がミピッチ目のハングに取りかゝつていろ間に雪洞は出来上り、彼は赤岳鉱泉へ下つて行った。

ハングは延々四時間の苦闘の末乗

り越す。ハング上よりトップを私が変り、右上へ更いトラバースをやる。リスがせくハーケンの利を失い、足元は大きくえぐれていて、取付はすこ左へ寄つてしまつてゐる。

あと少しといふ所でハーケンが無くなり、きわどいバランスで小リック・ワクスして外側バントまで下降する。しかし上部でハングを越してトラバースまでやつてゐるに、うまくバンドに着けず、塚越に手を貸してもらう。取付まではフイックスして

おひにザイルのおかけで祭に下る。

後続の塚越が登つてくる頃、雪が

舞い始め、すでに壁は白くなつてゐる。急いで次のピッチに移るが、暗くぼり始めた上に、二人ともアイゼンを持つていないので、この場所で

ビバークとする。明日あさ一ピッチ

登れば、雲稜ルートまでトラバースでき
るからと、一晩がまんすることにした
のだが、一晩中骨まで通るような寒気と
雪と風、体に付着した雪は体温で融け、
肌までしみ通る。こしまい、とにかく猛烈
なビバークである。

明けて二十三日、登ろうと思つたが、

壁は一夜で嚴冬期に逆戻り、付着したベ
ルゲラはハンマーだけではどうしようも
ない程発達している。体の方も何とも頼
りない程ガタガタになってしまった。止む
を得ず、下降することにする。

8時ザイルをダブルにし、持つていてア
ブミと全部つぎ足してようやく下の雪
面に降り立つ。一晩中降り続いた雪は一
歩にもなり、体の回りを音もなく流れて
ゆく。下手をすると雪崩でも起こしかね
ない状態である。

塚越も降りて来て、すぐにザイルを回
収し、大同心稜に這い上る。降りしきる
雪の中さ、昨日作っておいてくれた雪洞
をようやく捜して、もぐり込む。この日は一
日中寝てすごす。雪洞の外は

二十四日、荷をまごめて大同心
稜を下る。鉢泉にザイル、三つ道具
を預けて農場へ下り、その日の
うちに帰浦。

四月一日、先月預けておいた荷
を受取り、今度は鉢泉横にイグル
ーさ作る。

二日、ビバークを予定して取付、
へ向つ。天気が思わしくなく、今
回も駄目かとあきらめに似た氣
持で取付く。取付いた時間か遅く
、ニピツチ登った処で暗くなり始
める。左にトラバースして二人何
とか生れるバンドでツェルトをか
ぶる。風が強く、その後雪が降
り出した。

四月二十一日、最初にこの壁に

取付くべく入山してがらちようじ
一ヶ月目である。一ヶ月がどうと
つこの壁のために終ってしまった。
。

翌三日、壁は又しても真白には
なり、一見して登る気かしなくな
った。早々に取付まで下降、ザイル
取付、ニピツチ登った所から左
ヘトラバースして大凹角ルート
に入る。下半分を省略して上半部
から先に登つてあこうという寸法
だ。余り良い方法ではないが、時
間に迫られている私には、これし

ト下にホルトを埋めビバークサイ
トを作る。ザイルでハンモックを
作り、そこ中に入つて坐る。

五日、夜が明けでみると又もや
ると、何か意地悪でもされている
ようで腹が立つ、しかし何とも仕
方がはないので三度下降する。

私はあこ一度しかチャンスは
ない。四月末から又山小屋に入る
からだ。

四月二十一日、最初にこの壁に
取付くべく入山してがらちようじ
一ヶ月目である。一ヶ月がどうと
つこの壁のために終ってしまった。
。

この日は鉢泉に荷を置き、軽荷
で大同心に向つ。雲稜ルートより
取付、ニピツチ登った所から左
ヘトラバースして大凹角ルート
に入る。下半分を省略して上半部
から先に登つてあこうという寸法
だ。余り良い方法ではないが、時
間に迫られている私には、これし

四日、三度取付に向う。今度こ
そはと曰へい取り付くが、前回の三
ピソチ日より上へは行けず、ハン

か手はない。

ハーケン、ボルトと連打して洞穴状のチムニー下の小テラスに着く。このルート中唯一のテラスである。テラスより脆い赤茶けたバントを右に回り込み、大凹角に入る。大凹角は遠くから見に程す、きりしものではなく、下部は脆い岩くずの集まりで、お世辞にも快適とは言えない。

凹角の中程でピッチを切り、最後のピッチに入る。フナビ、ハーケンじ連打して凹角を抜け、上部のチムニーに入る。チムニーを抜けると程なく北壁に出て、このルート上半部の登攀は終了した。

大同心の頭を越え、大同心ルンゼから大同心稜に移り、明るいうちに鉱泉まで下る。

ピッチを清まし、また未登の四ピッチ目に入る。フリーで昨日の実験ルートからのトラバース地図まで、ハーケンを打たずに登り、途中にある小ハングも無理やり乗、越してしまった。五ピッチ目は大凹角の中までザイルと伸ばす。六ピッチ目も快適に登り北壁に飛び出した。

終、だ。終、だのである。長か、に登攀はついに終った。

大同心リヘン、トヨヨ通りのルートで鉱泉へ下る。

すぐほどまどめて茅野まで下り、私はその足で神岡の今田重太郎氏の所へ直行した。すぐに小屋を開けなければならぬからである。

使用、アブミを用いて外傾バントに上る。

ニピッチ目リ垂直の泥壁。ハーケンハ本、ボルトニ本を使いハング下まで十五メートル。ハングはアイスハーケン、ロックハーケン各一本使用して越す。A2級。ハング上のトラバース5級。ハーケンニ本。

三ピッチ目リハンゲはボルト四本打って越す。A3級。ハンク上のスラブはハーケン一本、ボルト三本・A1級。右上へのアブミを使ってのトラバース。A3級。小レッヂ手前のフリーは6級。三十メートルピッチ。四ピッチ目リリッヂをフリーで登る。5級。ボルト詰かい。ハングの乗り越し6級。ハング上のフェース4級。この間ハーケン使用せず。

五ピッチ目リ洞穴状チムニー下の小テラスまで、ボルト三本、ハーケン一本、アイスハーケン一本使用。A1級。右に赤い泥壁を回り込み巾

ルート説明

一ピッチ目リ脆いフェースを五本直上。ハーケンニ本、左ヘトラハース・ホールド詰かく五級。詰いバンドを左上へ登る。ハーケンニ本、外傾バンド下でハーケンニ本

広いパントを凹角内へ。凹角内は岩

腕く4級。三十糠。

○六ピッチ目リフサヒ一本、ハーネン一本を打って凹角を抜ける。A1級。チムニーへ4級)を抜けて北稜直下のフェースへ3級)に出る。あ

とは簡単に北稜に出て登攀終了。

北稜はニピッチで大同じの頭に出る・3級。

へ装備

ザイル 80m (ナイロン 8mm) 1本
アブミワコ・カラビナ 25コ
ハーケン 40コ (残置) ポルト 26コ
アイスハーケン 3. クサヒ 1.
ハンマー 2.

このルートは谷川岳南立岩正面

や、屏風岩東壁青白ハングにも、
勝ることもあらはいルートで、最後

まで異常に困難に危険にさらされ
る。充分な注意が必要である。

— 43年度 夏山合宿 —

剣岳

43年7月29日～8月4日

〈Mem〉 C.L. 本沢

(A隊) 本沢・清水・中田・吉野・山崎・掛川
木田・長谷川

(B隊) 鈴木孝・矢島・木村・佐藤・小野寺

〈日程〉 29日 (前夜登) 大町一墨4タムー内蔵助平一真砂沢出合B.C.

30日 基礎訓練

8月
31日～2日 (A隊) ハツ峰、源次郎尾根登攀

(B隊) 三、志一剣岳一別山一確山一越一雷
鳥平一剣沢-B.C.

3日 (A・B隊) ハツ峰 A,B,C 各フェース 登攀

4日 B.C. → 大町 下山

(註) 以下はこの合宿の記録の抜粋である。

★ 総走隊（B隊）の記録

○ 7月31日

三時半起床。相変わらず空は昨日と同じように雲が多い。時おり小雨がパラついている。

一昨日の腰の痛こも昨日の午後からの停滯でや、回復したようである。ラーメンに餅をませた朝食をヒリ五時出発。四十五分位で二股に着く

こ、から見上げる三窓雪渓は傾斜も適当で、雪渓に人の姿も見えず、まるで我々の登るのを待っているようだ。ボリタンに水を入れ、雪渓を

登り始める。雨も止み、雲も切れ始めた。中腹で視界が利き始め、喜ん

だ。下の山の間、最後の一ピツチといふ所で突然ガスが出てきて、気が付いたときにはコースを間違っていた。地図を複数に右斜め上にトラバース、ようやく三ノ窓に辿りついた。三窓雪渓の登り予定時間半もオーバー、これが後にほ

て響いたようだ。11時15分出発、次の目標、ハツ峰の鞍部までは碎石が多く、砂利の上を歩くようで手こすった。ハツ峰鞍部着12時40分。

1時15分出発。二ヶ所のルートはキスリングを背負っての岩稜歩きでスリル満喫である。剣岳本峰着3時40分、計画の時間よりかなり遅れている。小雨まじりの濃いガスで展望の得られないのが残念、頂上の空缶

ヤ紙屑の散乱は目に余るものがある。登山着りモラルの低下の現れであろうか。

○ 8月1日

昨日の疲れで皆ぐっすり眠った。6時起床、今日はコース変更のためや、くり朝食をとり、各自ピツケルサブザックの軽装で9時30分出発。御前小屋より別山頂上まではゆるい登り、別山から立山へと向かう。剣岳へは下側に捲道もあるが直接登る。雷鳥がヒナを連れて散歩を楽しんでいた。思わずカメラのシャッターを押す。富士の折立附近よリコソゴソの岩尾根が雄山まで続くな。適当な幕営地もないのに計画を変更し、剣沢小屋のキャンプ場へ

向かった。5時45分前剣着。皆疲れきって、たゞ気力だけで歩いている感じた。落伍しかるべき者がいれば皆て力バーサ合意、チームワークの力を何とか頑張り続け、6時50分一腰剣、そして7時30分、暗くなつたガスの中、ようやく剣沢小屋のキャンプ場に着く。14時30分、きびしい訓練であった。（小野寺記）

小中学生、老人等も多かった。一ヶ月連中も戻り、BCは一段と活気を増す。

越へて下り、雷鳥平へのやさい下りを辿るうちに、行程かうあやしました、た空からまた冷たいものか落ちて来ました。雷鳥平には色どりの天幕が張られ、きれいだった。剣脚前ハ屋へ向かう途中、ほ、之ましい親子連れの姿も見かけた。

剣沢のテントには5時10分着、今日は昨日にくらべてとても楽であった。
（木村ニミ子記）

○8月2日

今日は久しぶりに晴間が見え、皆の顔も明るい。まわりには色彩豊かな天幕がひしめき合い、我々の立くには女子学生のパーティが居り、樂しいエピソードも生まれたようだ。

リーダーの命令で今日は真砂沢出合のベースキャンプへ下り、A隊と合流することこと、10時にパッキンゲを終り出発。剣沢の雪渓を下り、10時55分BC着。午后はゆっくりと休養、明日の岩登り訓練のための休

合同で夕食を振り、夕食後皆て山の歌を唱う。山男、山女の歌声が星空に吸われるよつに舞い上がる。

新人の自己紹介も、明日は何が待ちかまっているのかも忘れて、このムードに酔い込んでいた。

（佐藤清司記）

★ A隊の記録

○ハツ峰6峰Aフェース正面ルート

本沢直彦・木田清 (Fig.1)

オーピッチは7m位のフェースを登り草付のバンドに出て、セカバンドを左にビリ、カンテに沿って数m登り、ブツシユの中さトラバースしてテラスに着く。30m位。

ニピッチ目は不安定なブツシユミトラバースし、開いた凹角状を登る35mであり、このルートは登攀石が多く、部介町にはアフミを使用したい所がある。

三ピッチ目は40mいっぽい伸びます。

始め凹角から抜け出す所が悪く、一枚岩がかかるふさりそこをアンダーホールトにフリフションでトラバースする

のルートの一一番きびしい所は、凹角に向かう途中のトラバースだった。

取付 10:30

終了 12:20

（木田記）

○ハツ峰6峰Aフェース正面ルート

清水英男・長谷川元春

取付は遭難者墓標の数石側。

岩小屋右より取付、岩小屋の上部を約10mトラバースして、小さなハング帶を約10m登り、こよりや、下降ぎみにトラバースしてルンゼに取付く。このルンゼかうは魚津高ルートと交わる。

こ、からはカンテの登りとなる。こトにフリフションでトラバースする

出る。このフェースは残置ハーケンとホールトにとり登る。このピンチ

後はコンティニュアス10mで終了する。

このルートはルート表になく、フ

レードも不明だが、清水さんり評価では、部分的には5段程度があり、全体としては4段位とのことである。

(長谷川記)

○八峰6峰Bフェース

掛川疏之・吉野武

先行パーティ有利、取付奥にて30分待つ。一ピッチャ目、10m位フリーク

ライミング。そしてアッシュホールドを30m登り、40m伸はし、ハイマツにビ

レー。

ニピック千目、ハイ松テラスより散

集登り、カンテを左に回り込み、快

適なカンテ登攀が始まる。30mでビ

レー、三ピック目。カンテを数回登

り、馬の背を直して歩く。又数mの

カンテ登攀でBフェースのピークに立つ。

(掛川記)

○八峰6峰Cフェース

(RCCルートから右方)
ルート

吉野武・木田清

取付奥はRCCルートを通り、あとは適当な所で

登った。中央部のハイ松

帶からはRCCル

ートか余り混み合って

てるので、RCC

ルートを離れて右方

へ登りに移った。

こ、から上部もやはり快適なフェース

ライミングがてきて、右方ルートに移った。

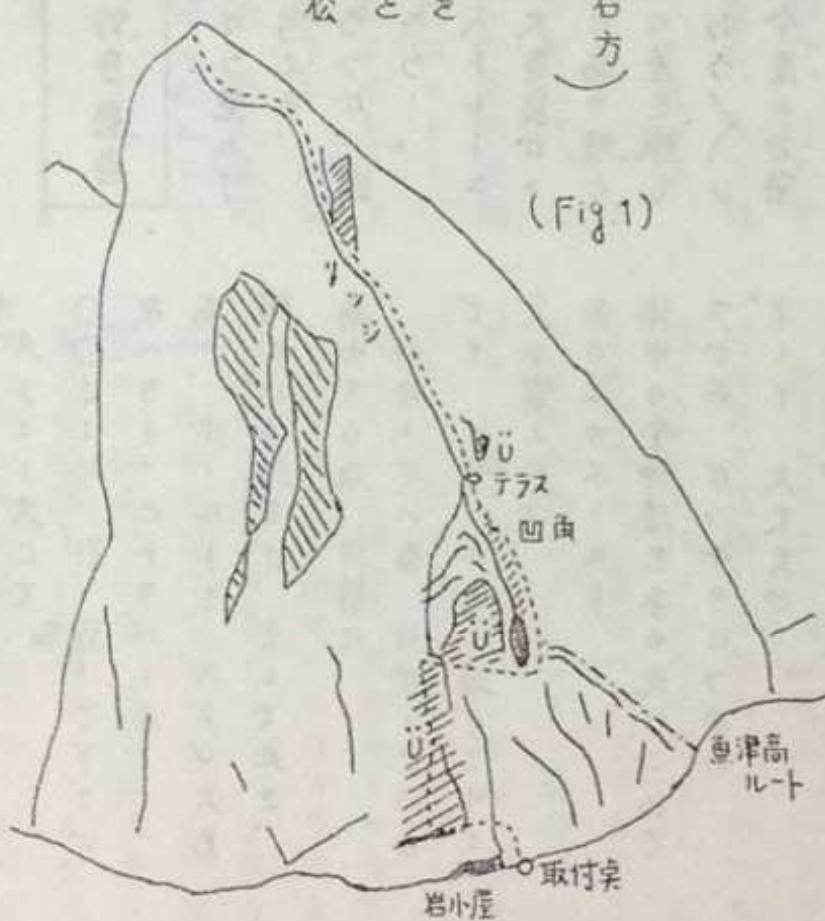
○源次郎尾根より本峰

本沢・清水・中田・吉野・木田
・長谷川・掛川

朝テントから顔を出して空を見上げると、今にも泣き出しそうな天氣である。今日は皆が樂しみにし

取付 7.25 終了 9.10

(木田記)



ていたチングル登攀の日である。しか

し天気の具合から相談の結果、源次

郎一峰の壁の登攀に決めた。

5時30分、BC出発、剣沢をつめ源

次郎一峰に向かう。源次郎尾根の末

端より平蔵のまついい雪渓をつめて、

一・二峰のコル着7時30分。

ガスが出て来て視界は余り良くさ

がす、取付は良く分らなかった。

先行バーイテイがあり無名ルンゼを登

っている。霧ションになつて未だた

め、一峰の登攀は中止し、源次郎尾

根を全て本峰を目指すことになる。

一・二峰をまき、二峰のコルに出

る。源次郎尾根をつめ、9時10分本

峰着。ガスで視界はきかない。でも

頂上は登山者で満員である。

10時45分本峰発。本峰を出る頃、
大粒の雨が降り出す。急いで下山。
しかし力二の横這いで混んでいて、
なかなか進めない。相談の結果、平
蔵をグリセードで下降する。

ガスで下り視界がさかず少し調子

が悪い。50m程グリセードしたとこ

ろごとく失敗し、10m程滑落。しか

し運良く滑落停止で止まる。

なおもグリセードで下降し、剣沢

に下り立つ。

真砂沢BC着1時10分。

(掛川記)

初めての岩

小野寺豊喜

登ろうとする岩を下から見上げ

ると、いろんなことを考える。

果して自分に登れるだろうか・途

中で力が尽きて落ちたら…。

合宿の前に日和田山ヘトレーニ

ングに行つたことは、大変良かつ

たと思う。今度の合宿とあの時ど

では心理状態にすい分の差を感じ

た。前のときはたゞおろくび

くびくしていいたのに、今度の合宿

では、少し、登ってやる。ごいう

意欲かがほり持てたと思う。

岩は、技術的な、また肉体的な面が勿論大切であるが、精神的な面の強さが大いに要求されると思う。

まだ始めたばかりで何も分らぬが、これから大いに勉強し、一つ一つこなして自分のものにするよう努力するつもりだ。

Aフェースにて

山

○○さん、引、張、こ下さい。

左へちよ、とトラバース

あ、ホールドもスタンスも

何ごいう細かく、そして丸さ、

あわてるほど、冷静に

わかっている、わかっている

でも一分、二分と過ぎてゆく

足が震えにす……。

あの上のホールド

体中の全神経を手の先にこめて

つかむ、ガツチリとつかむ

オーライ、大丈夫かー、

私はたっぷりと空氣を吸い、首を

ぐいと上げて上の空間に叫ぶ

大大夫、今行きます、

屏風岩の記録

1 屏風岩東壁育白ハング縁ルート

42年10月20日

△ Mem ✓ 奥園義輝・塚越国雄

奥園義輝記

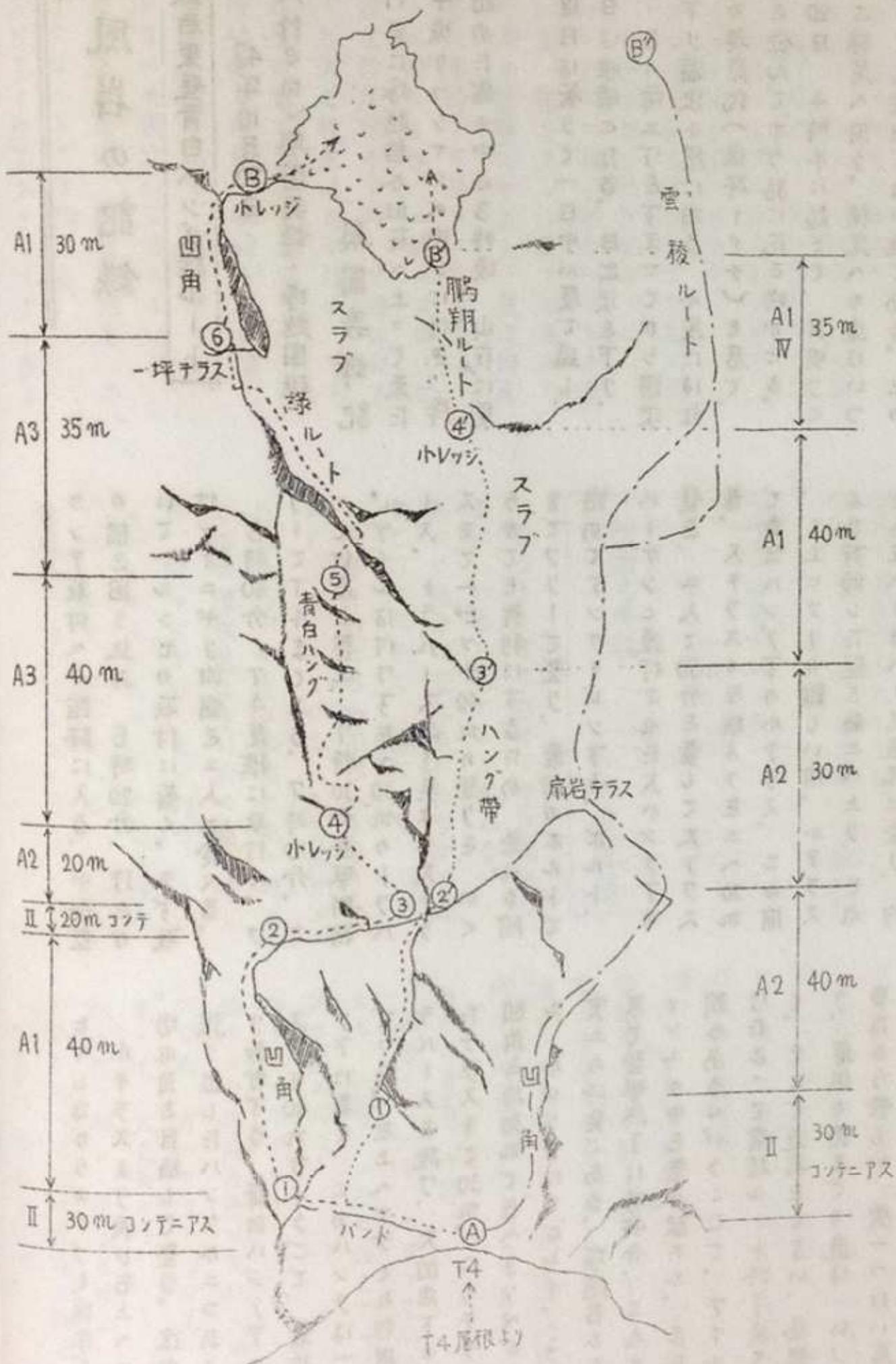
17日に塚越君が山荘へ上って来た
午後からヤンヘ遊びに行き、降
り始めに雪の中さる時候、山荘に戻
る。

18日は曇りて一日中小屋で過し、
19日は快晴となる。白出沢を下り、
ボッカリ荷上げとしませてから涸沢
へ下り涸沢小屋に泊る。小屋には社
長の奥原氏（通称イタチ）も居て、
酒を飲んでホラ話に花咲かせる。
20日、4時半に起きて、月明りの
中さ横尾へ向う。横尾への道はいつ
通、ても面白くない道である。三の
ガリより対岸のニルンゼの押出し
へ渡り、新道へ下ること少しで中央

カンテ取付への踏跡に入る。中央壁
の裾を回り込み、6時20分、汚さか
いて一レンセリ取付に着く。まず取
付てオニギリ四個を二人で食べる。
6時40分、T4尾根に取付く。フ
リーテT4まで上る。7時10分、こ
で仕度を整え、7時30分登攀開始
。ザイルは付りす左へ30mのトラバ
ース。トラバース終了点より大テラ
スまで一ピッチ40mの登りをいく
うかても有利にするため、登れる所
までフリーで登り、最初の不ルトで
始めてアンサイレンする。ボルト、
ハーケンご連打された大ハング下の
壁を、二人で50分を費して大テラス
で青白ハング下の小テラス。この間
人工ヒフリの難しい所、小テラス
より前傾した壁を右上へ上り、それ
から左へトラバース気味に登り、約
20mで又小テラス。このトラバース
はボルトが余り利いておらず、ヒヤ

ヒヤしながらのアブミ操作である。
小テラスより再び右上へハングの
切れ目を目指して登る。途中一ヵ程
張り出したハンケが二つあり、かな
り苦労する。青白ハング下の小テラ
スより40mちょうどまで、最後のハン
グ下に着く。こりハングは一番手こ
すつに、左上へアブミを利用してト
ラバースを読け、大凹角下の安定し
たテラスまで30m。このテラスより
凹角を約30mで右へリソベを回り込
み、小レソジにてヒレイ、こ、か重
実上の終点である。塚越君が登って
来て登攀終了11時45分。これからア
ンシユの中を登る誤だが、まだ残い
所があるにいって、ザイルはつけたま、で雲稜ルート終了点まで行
く。そこを通具をしまい、昼飯を食
う。屏風の頭まで直進は、いつもの
事ながら苦しい、雲一つほい屏風の
頭で、写真をどうにか、コケモモの
実をこなして、楽しい一刻を過

こす。最高コルで塙越君と別れ、私は渓沢への道を辿った。



屏風岩東壁鷹翔ルート

43年10月16日

H.M.E.M.V 奥園義輝・植木一光

奥園義輝記

涸沢小屋まで前夜下しておき、今

日また暗い中を屏風に向う。

最近、かよく歩るとかて、暗い道を歩くのは余り良い気持ではない。特に新道に入り、木の根の多い歩きすらい道を行く時など、今にもわざの方から走り出してもうて、全く氣味が悪い。こうしてみると私は案外臆病者であるようだ。

新道から入れて、昨年の同じ頃塚越君に通った溝を登っていたら、途中からおかしくなり、又新道から登り直してみたがヤハリ同じ。何でもい、から歩け歩けと遙ニ無ニ登つていたら、屏風の裾を通る踏跡に出た。こり道を一ルンセへ向けて歩くうちに、ようやく東の空が白んでき下に出て、浅いくぼみを登る。途中で昨年夏登った中央壁ルートを見上げたら、何か謂い曰いすじのようなものかついている。よく見たらナイロンテープである。こんなものがフイツクスローパヒして使えるわけがないから、おそらく今冬の登攀のために、ルートの目印にしたのである。もしそうだとしたら、何ごもつまらないことをしたものである。

最近、岩登り遊びも行きつく所まで行きついたの感がある。

6時少し前に取付に着く。いつもは見るルンゼの雪渓も今はなく、

雪崩等で雪ばれて東側の枯木の折れたものが無数に転がっている。私が始めて一ルンセを登ったとき、

こり取付附近はまだカラの斜面でのつたが、今は何パーティもこゝにハーフすうと見えて、秋色これまでビバーフサイトに見える。

仰ければ上空は風が強いと見え、竿の群が大活動を始めたのが如く、すっかり明るくな、た空を高積雲が西かき東へ飛んで行く。

屏風岩は今回て十二回目。この屏風岩については昔からヒヤカく言われていうが、畢竟、山登りにしての岩登りではないことは分っている。しかし訓練の並程において、この屏風が果たす役割は大きい。我國の岩登り史における屏風の存在は見逃かすことの出来ぬ事実であるし、今後も貴重な存在として、絶対な人気を保つであろう。

アンサインせずに取付く。丁度までの下部の登攀は、いつ登つても嫌な所である。岩が冷たくもう素手で取付く時期ではないようである。

丁十に着いたら、こり秋の連休の遺物があうう、廻周誌や破れにポンチヨか、あたり一面に散らかり、こしもの屏風も、東京近郊の依山同林になリ果てた感がある。

7時登攀開始・下部駒駆ルートは

40mちようどの人工金攀て、大テラス左端に着く、大テラスは今年の春雲駆ルートを目指して卓然と登った折り、ニ晩続けての苦しいジバークとさせられた思い出の場所である。

大テラスより、ルートは青白ハング帶の右端に沿、てつづられており、最初の小レッジまでの30mは完全な人工登攀である。前傾したフェースは途中に小ハングミ重ねており、結構体力を消耗する。

疏くピッチはボルト通り壁で、ボルトカ間隔が遠いこと以外、大して難しい所ではない、たゞ打たれているボルトが古い上に、浅いため、やたらにアブミり上で暴れいだめ、面白いのが面白くないだけである

40mちよい、ぱいで小レッジに着く。そこで後続の植木君を上する。
次のピッチは、もうこのルート最後のピッチもあり、また見たところ今迄の困難さは無いと見て、トップを彼に譲る。

15m程は順調に登つていたが、そのうち動きが止、てしまい、モタモタするうちに、ニ古しかないアブミのうちの一つを落してしまった。ピ

ュンという音を残してそれは彼を確保している私の頭の上を通り過ぎ、はるか下のールンセに落ちて、乾いた空気の中でカラランカラランと音を立てて立てる。

彼は止むなくセルフビレイ用のシリングをアブミ代りに使つて登つ

て行つた。この最後のピッチもほど40mで終り、時計を見ると、ちょうど十二時半には、ている。

終了点より、なおサイルを引きずつて登るこニヒッチで雲駆ルートの終了点に着き、ヤレヤレと腰を下す。朝、取付奥で握飯を一個食べたりに付けて、猛烈に空腹を覚える。飯を食う前に、まず山荘からくすぬで来たコカコーラを飲もうと、ハーケンを当て、ハシマード努め叩いたら、その元からもの凄い勢いでコーラを吹き出し、体中コーラの泡をあじて、中味は半行程にはま、下。

飯を食つて道具をしまえば、あこ

はお定まりの長い屏風尾根を登りが

待つてゐる。カタツムリの如く、屏

風り頭へと歩を運ぶ。

屏風の頭から腰は、疲れきつ

た目には、むしろこれからの帰路の

絶望的な長さをため息をこそりのみ

である。

重い足を引きすりながら、たまに

見つけるコケモモのせ解つぱい味をわざかほ救いに感しつゝ、夢遊病者の如く歩く。

洞沢まではまだ遠く、ましこ我が

穂高山荘は千里の道を思はせるのである。

屏風岩東壁鵬翔ルートー前穂東
壁右岩稜右カソンテルートーBフ
エース右ルートーAフェース右
ルート連続登攀

43年6月22・23日

ヘMム・掛川統之・塚越国雄

掛川統之記

22日晴、横尾岩小屋発4時50分、
一ルンゼ押出しきつめ、下部岩壁着
5時40分、T4着6時45分、取付7
時15分。下部鵬翔ルートを全て、大
テラス着8時50分、核心部である赤
茶色の前傾フェースはかなりのバラ
ソスを強いられ、最後のハシケの
出口のハーケンはきいていい。ニ
人用テラス着10時50分、次のピソナ
は最上段に來るので、又バランスさ
は強いため、ボルトは良くさいてい
ない。最後は10mのフェースを登り
、後は灌木、アリシユにつかり登り
攀終了矣14時30分、屏風を頭着16時

最低コル17時15分着。こゝにてビワ
アーフ。

23日、晴、最低コル発5時30分。

北尾根を絶えまして、三・四コル11
時着、三・四コルの雪渓を下降し

て東壁石岩稜取付矣着12時30分。

取付13時、上昇バンドをニビソチ登
り、古川ルート取付矣13時40分、右

に広いバンドと5mトラバースして
右カソンテに取付く。取付や、ハシケ
気味、人工登攀で20m登り、二人用
テラス、最後のビソチはフリークラ
イミング、登攀終了矣より左にトラ
バースしてBフェース右ルートに取
付く、快適なフリークライミングで
ニピソチ登り、終了矣に着く。

引続きAフェースに取付く、乾い
た岩はフリクションが良きまき、快
適なフリークライムが楽しめる。
3Pの登攀で前穂頂上着16時20分。

北穂高岳滝谷の記録

1 滝谷ツルム北カソンテ(仮称)

43年6月26日

ヘMム・奥園義輝・掛川統之・塚
越国雄

掛川統之記

穂高山荘8時30分発、D沢下降、
スノーコルを全てC沢にトラバース
さみに登り、取付矣着10時40分、取
付矣は残雪が多く不安定。一P目、草
付キフェースをフリーで15m直上、
二人用テラス。二P目、右へ広いバ
ンドを回り込み、フェースを人工登
攀、ハーケン3本連打、人工からフ
リーに戻るとき、スタンス、ホール
ドが細かい、20mで草付テラス。
三P目、10mの凹角をハーケンキ
本連打で人工登攀、取付が非常に悪
い。カソンテを左に回りこんで、落き
石のある二人用テラス、15m、

回P 目、4m程の前傾したフェースをハーケン3本連打で人工登攀、

カンテを石に回りこみ、フェースをフリード5m直上、草付上昇バンドを少し登りニル用草付テレス。

5P目、15m程の凹角状フェースをハーケン7本、アイスハーケン1本連打の人工登攀。出口か50cm程のハング、ニクハングほど悪くない。

トキトラバースするとオ四尾根に出る。そのまま、ツルムのピークまで、登攀終了15時15分。

使用ハーケン24本、残置ハーケン4本。

オーピツテ以外は全て人工登攀で、浮石が多く、テラスほどにはかなり大きな浮石がある。

2

滝谷オ5尾根。ピクナルフランケ

43年7月26日

(アルムクラブ)

ヘメル・奥園義輝・細田充男

奥園義輝記

オ5尾根フランケは、今迄に目をつけた人も何人かいようであるが、今もって未登である。アプローチの悪さと、極端に脆い岩廻りせいであろうか。

ハングと越し、右へ10m草付ハン

ドキトラバースするとオ四尾根に出る。そのまま、ツルムのピークまで、登攀終了15時15分。

使用ハーケン24本、残置ハーケン

4本。

オーピツテ以外は全て人工登攀で、浮石が多く、テラスほどにはかなり大きな浮石がある。

12時30分、私がトソアで取付け、右手は大きなハシクになりて、左守りに登つてハングり上じ思ふ所から、右上にルートを取る。

登つてみると結構ホールドもあり岩廻も良い。40㌢い、ぱい伸はして目標とする凹角下の外側バンドに着きビレイする。

右上にも凹角があるが、やはり最初に目を付けておいた凹角の方を面白そりである。

トソアを細田に代る。ハンケッタ下を左にトラバースして、いよいよ凹角に入る。

この凹角は完全に三面で、部分的にはハングしている前もある、トソアは長身と腕力にものを言わせて、イレインご下降し、山荘から一時間近くもかゝって取付に着く。

飯を食べてから、首をねじ曲げてルートの選定をする。壁の中央に魅力的な凹角があり、それを目標に登ることに決定。始め考えていた、最も長いところはそこまである。内に登攀する途中で腕力がなくなり、程難しいところはそこまである。

にりお終いである。引れて、凹角内でピッキを切る。

三ピッチ目は私がトツアに代り、なお凹角をつめる。途中のハングでアフミの危険にはうが、何とか凹角を抜ける。

凹角を抜けたからは岩が非常に脆くなり、かつ垂直のフェースは、ちっこくも気の休まる所がない。

40㌢いっぽいでピタナルに着き、ランケの初登に成功。

5尾根の脇いリッヂを、なお40㌢三ピッチで稜線に出で、登攀終了。15時である。

使用ハーケンは全部ご8本、うち5本はヒレー用に使った。

非常にハーケン数の少いルートであるが、明うにオ2尾根P2フラシケリ早大ルートにこれを凌ぐルートである。今後冬の登攀が問題である。

。荷の減ったのに安心したのも束の

北岳バットレス

43年6月1~3日

<Mem>

牧野要雄・塚越国雄

吉野武・吉田毅一

牧野要雄記

向、C下沢の雪床は長くてうんざりする。

や、こ着いた下部岩壁はCカリーダ下部岩壁、十文字クラック共に水が流れて黒々と輝いている。早朝の冷えこみに水が涸れることを期待して、C-D下沢向の草付斜面にピックルを振る。今夜りて、やかま油場を作る。太陽は背後の山稜に消えてしまふ。だが、まだ眼下の谷間は明るい。我々は夕餉をそこそこにソエルトに潜り込む。

夜明け前より寒さに目を覚まさせられ、すぐにヒゲアーツ地を発つ。

期待に反して下部岩壁は水音さえ立っていない。やむなく予定を変じ、Cカリーダ岩壁を登る。ベルグシユルンドを越え、不安定なアロツクミ達うようにして、一P+右手の逆層スラフを凹角を抜けて窓上に一P半。

取付の雪床よりはコンティニュア入100㌢程で窓口に出た。

滝口の広場で以後の為めに、横断バンドを確認してから、下部フランケに牧野・吉野、Dガリーアーと壁へ塚越・吉田の二パーティに分れる。

Dガリーアーを行く二人を見送り、トップを釣瓶式に交換することにしてアンザイレンする。

取付が不明瞭で、ルートに思えるクラックにはDガリーアーから三本のバンドが達しているが、真中のバンドを渡ることにする。

バンドはもうくつ外傾している上に、途中で一段上うなづくことはない。20mで凹角に入り、更に15mでDガリーアーよりの上段バンドに出る。バンドには残置ハーケンと岳桿があり、良い確保点になる。

二P目、ハーケン連打の広いクラックを、ハングに頭を押さえられるまで登り、ハング下を左のフェースに出て直上。フェース上カンドを右ヘトラバースしてクラックに戻り、40m、ハング下を軽くチョウクス

トンに乗ってトワープを交換する。

三P目、クラックを壁とサイ

ルトラバース意味に左縫りカンテに立る。カンテより左手のスラブを直上して、上部のクラック下まで登る。スラブは近層の

に立、一ヵ所一m半り段違いの垂直壁があるのと、スラブを右や左にルートをこらすため、サイルの動きが悪くなり苦労する。

四P目、クラックの右へりさ5m登ってからクラックに入り直上。またこのルートが不明になる。真上はハンブしたピース、右はかぶった壁下の細いバンド、左は傾斜の落ちたスラブだが、先はカンテに隠れて見えない。先を急ぐので右へのバン

トを伝い、オ四尾根のニピッチ

下部フランケは逆層のスラブ

へタ打ち状にあるが、ほんときいていい。

オ四尾根は二人とも登っているので勝手は知っている。Cガリーアー側のスラブ

内にクラックを登り、ヤーフルヘーピソチ。

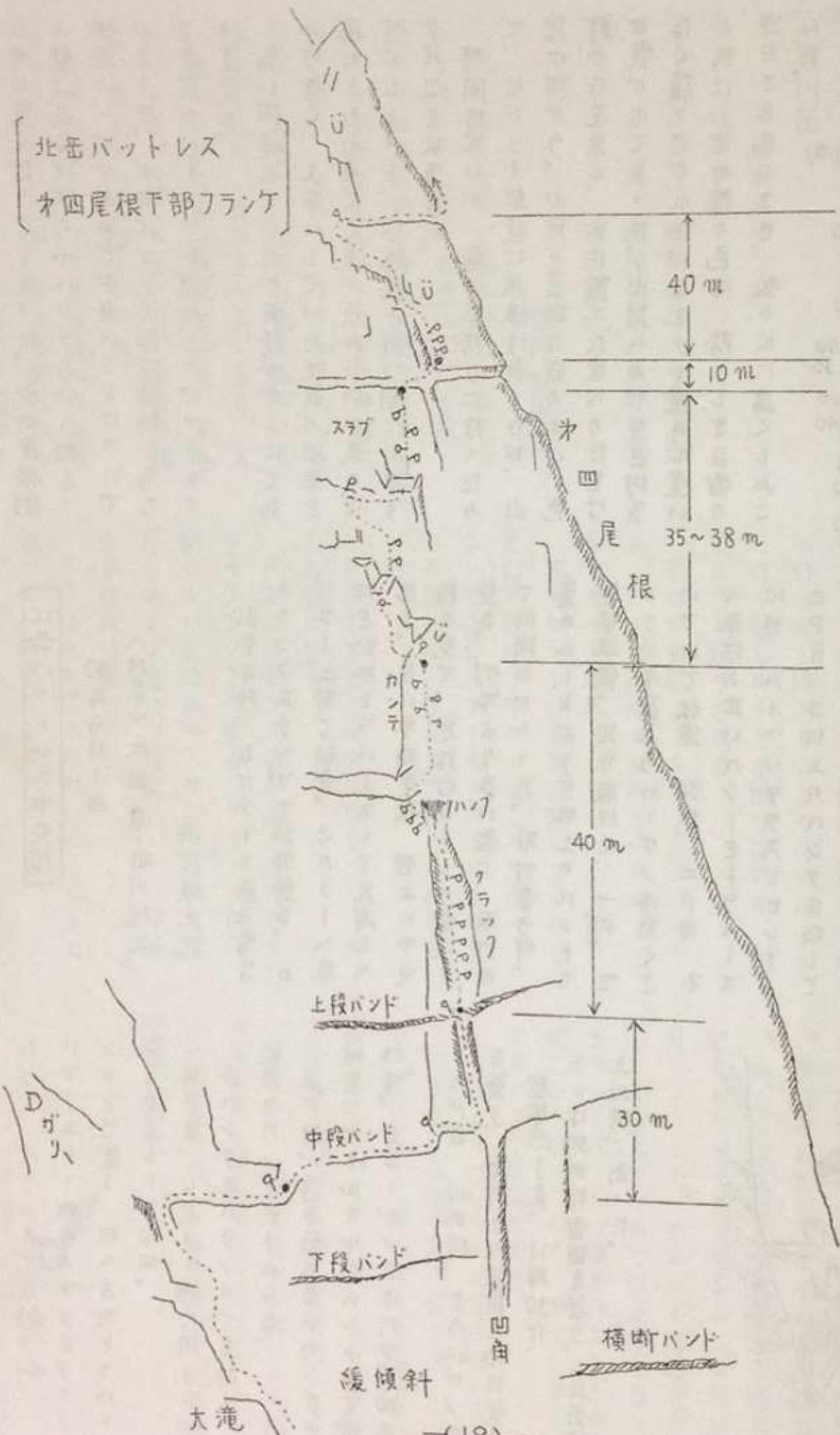
ニP目はオ四尾根核心のマッチ箱のナイフリッシュを越えて、マッチ箱のコルヘの下降桌へ。コルを覗くと、人待ち顔の塚越・吉田がいる。

マッチ箱のコルより中天稟までは草付バンドを50mトラバースし、10mの下降してDガリーアー雪渓に立。30分で達した。(17)

またこのルートは松嶺ルートの牧野・吉田じ、中央ルートの塚越・吉野に分ける。一ヵ所のハングに悩んでいる塚越を横に見て左ヘトラバース、リンネに入れる。リンネをつめずにハング帶を抜いた所より、五尾根スラブに出て直上。オニハング下のバンドまで一ピソチ半。

白いものばかりくくと落ちてきた。

オニハングは見かけ倒して、くさび、アブミを使用した為り、右に出られず、きりしまで、オ三尾根間にトラバースす



るのか悪くほってしまった。赤三尾根側

の壁にあるはずの小ハングも分らぬま

快速に一ピッチ半で中央バントについてしまった。中央ハント上部は傾斜も落ち草付やハイマツが現れ、一ピッチ半で終了采に。

長い間登れていった中央稜が余りにもあちこちなく、大手にしていた玩具の風車と風にさらわれてしまつたみたいに気が抜けてしまった。塚越達を行つ間にかかるタバコも味気ない。

時間は早いが、雪が本降りにはつたので、Cガリ一與壁に未練はあるが、山頂に向かう。山頂の眞白な雪の上に、色鮮かな花束か、山に散った友へりたむりが置かれてある。山頂への一步を何気なく譲つてくれたパートナー達の心遣いと共に、その花の色は、降りしきる雪の冷たさも忘れさせ、私の心に温くしみこんだ。

広河原	9.00
ニ股	11.00
	13.30
B.P.	15.00 (油)
	6.30
ブランケット基部	8.30
木4尾根	12.00
	12.20
マチ袖コル	12.50
	13.30
中央稜取付	14.00
	14.40
終了采	16.15
	16.40
山頂	16.50

北岳バットレス中央稜

43年6月1日

ヘメム 木田清・掛川統之

掛川統之記

B.C.登6時、bガリ一の急ほ雪渓をキックステップで20分登る。b

ガリ一上部で朝食。Cガリ一へ草付き20mトラバースして大滝上へ

出る。左にや四尾根、頭上に中央

稜を見て、急ほCガリ一の雪渓を

登る。例年より多い雪で、取付まで時間がかかる。取付着9時。

夏のルートより5m上のバンドで登攀準備。30分取付く。一ピッチ、左

のリンクネ真上のハーベンは良くきいていて快速、30m。二P目、右へ草付の広いバントをトラバース

10m。ハイマツテラスごビレー。三P目、3m上のハング目指して

ツルツルのスラブを2mフリクリンで登り、アドミて乗越す。(

ありす、バランスで乗越す)。

ハング上の1mのスラブをフリクリンで登り、右へ3mトラバースしてビレー。10m。

快適はカンテ登りとなる。小ハングをバランスで乗越し、

快適はカンテ登りとなる。

五P目、浮き石の多いカンテと傾面にサイルを中央バンドまで伸ばす。ビレー・ピン2本打つ。30m

。六P目、10m程、もう一カンテを登り、草付きの凹角を10m登り

登攀終了矣。11時30分、

あこは30m程雪田を登り、北岳頂上12時であった。



谷川岳

一の倉沢ミルンゼ

43年9月

ヘム／牧野要雄・中田弘

淀籠博太・吉野武

吉田毅一

牧野要雄記

ねほけよなこで見上する今日のコ
ソアはやけに高くて遠い。この前
時間切れのため半分程で登りそこな

Fは中央壁よりコンティニアード
ス、F1は右岸の凹角を一P半ご三
ルンゼとの境界リソジ上に出る。
次のピッチは渾身を直上してから
出口を石にトラバースして落口へ。
こゝて持参のサイルの長さがまちま
ちの為めと、5人で3本のため苦労
した。

F2下までは快適なスラブで、各
人各様に登る。
F2は右寄りの流水溝を避けて左
手のクラックを登る。クラック内は
脆い上に出口がややかぶついていて、
見ためより悪い、残置ハーケンはあるが信頼は置けない。

(20)

登ってみると、衛立は色々なスタイル
が入り乱れ、鉛なりの人である。人に追われて鳥帽子奥壁も諦め、本谷
バンドまで出てしまった。最後の頼み
滝沢下部も詰っている。

皮肉な青空の下で不負荷れて昼食
をとる。ところが、その昼食も四ル
ンゼよりすさまじい落石に脅かさ

れて、のんびりこまない。さて何處へ行くか。残っているのはミルンゼだけ。誰もルートを知りはないか。頭數に町が頼りである。

Fは中央壁よりコンティニアードス、F1は右岸の凹角を一P半ご三ルンゼとの境界リソジ上に出る。

引に入りこむ。チムニーは奥行きは深いが登るにつれて巾が狭くなり、チヨンクストンに頭を押さえられた所で左へ回りこんで、チヨンクストンの上のテラスに出る。

F3より一ピッチで緩傾斜のスラブに出る。正面は黒い壁だが、ルンゼは左に大きく曲りながら稜線草付帯に消えていく。スラブを少し登ってから中央壁より縁く草付稜へ登る。こゝでトップの起した落石が淀籠の手の平を切る事故があつた。意外に出血したが、止血処置をして県境尾根に出た。

F3は水の落ちる暗いチムニーとなつて、正面をふさいでいる。

幕岩正面壁登攀

43年5月12日 瀬水英男記

アーフしてだいだい鳴をあけて、基
部の岩場にて、まつりられた。はか
れた岩を抱きかゝる、三段支持の姿
勢で。

内心の動搖をかくし、吉野君に照
ら笑いの顔を見せて、「大丈夫だ」
と声をかける。しかし一ピッチ目、
登り出して取分でこんな事にはこう
ことは夢にも思ひなかつた。

まあ登り出しの253m位だったに
がら良かつたもの、登攀半ばてあ
つにらど、背筋かぞーと寒くなつた
。打つた右足の膝をさすりながら彼
に短い言葉とかわして気分をまきう
めせた。

ようやく気分のおさまった頃、腰
の屈伸運動等をやり直して、再び取
り付く、しかし頬がまぶし硬ばつてい
る。自分が自分でも感じられる。この一
小、雨ではないのに岩が濡れている。

ピッチ目は、41年7月3日、塙越君とオ
リジナルで、3登を狙つて悩んだのが、彼の体が不
調だったのと雨のために一ピッチを登り
洞窟に石刺と並いて涙をのんだのであ
た。昨年は自分の都合が悪く、この壁を
訪れる機会が無かつた。今年に入つて始
めて、それも昨年九月の谷川岳以来のハ
ケ月ぶりの岩登りである。あまりに壁が
濡れてあり始末が悪い。

はげ落ちた個所まで登り、浮石を大小
構わざ落してしまつ。こ、から左側のハ
ング帯まで脛い中を斜上する。ハングの
赤さびたハーケンを叩き直し、カラビナ
をかつて支えらし、右手崩れ落ちた上部
にハーケンを打ち、アブミをセットし直
上する、ニ本連続的にハーケンを打ちた
してバント状の所まで登る。既設のルル
トでハーケンを打ちながら登るのも久し
振りである。それにしても岩がもうい
めせた。

モ。

二ピッチ目、僕の打つたハ
ーケンを抜きながら登つて来た吉
野君を洞窟まで上げ、2m下
から左に振子トラバース気味に
ハングに取り付かせる。このハ
ングは全体にかぶつたもので、
最初はスムーズにい、たのだが
打ちこまれたボルトの間隔が長
く、次のボルトにセットするの
に苦労しているらしく、彼の声
だけがはげしく、ザイルは余り

そのために両手はもう泥で真黒
である。ハングが圧倒的に頭上
にのしかかる中で、一ピッチ最
後の洞窟の下に着く。このフェ
ースは一昨年はにしかフリード
快適に登つたものにか、岩の崩
壊のために悪くなつてあり、人
工登攀で洞窟の下のクラックに
強引に入りこみ、背中のザック
をこすりながら右手に移り、残
置ハーケンを見つけてこれを手
かかりにして洞窟の中に入りこ
む。

伸びない。洞穴の中などかっこ腰を下ろして下を見れば、秩父の煙突から灰色の煙、それに対照に羊山公園は新緑が美しい。ハーレンの音が響き、ハングを越してフリーの部分になつたらしく、ザイルをするする伸びる。しばらくして登つてきこ良いこの声がけ、る。ビレー用のボルトにか、った捨縄を利用して振子トラバース気味にハング下の広いスタンスの上に立つ。ハンマーに打ちこまれたボルトは初登の際のものだろう。赤サビで渋いためにぐらぐら動く。心もとないが、新らしくボルトを打つ時間が惜しく、アブミをセフトする。アブミの最上段に来り、次のボルトに手を伸ばすが、間隔が長く、ゼルプストで身体を確保してから空間にぐつに乗り出し、ようやくアブミをセフトする。アブミの乗り移り4回、人工を終え、左に斜上するバ

ンド状のフリーの部分に入る。いつでもそうだが、人工からフリーに入るときは不自然に身体が固くなり、いやな感じだ。小さき灌木の根を頬つて、吉野君の待つ灌木テラスに着く。

三ピッチ目、左に斜上して来たのを、今度は右側正面に向かうのは早いものだが、確保して待つて小カンテを登る。岩は硬く乾いていてスソキリしている。ホルトも豊かで、スピーディにザイルが伸びる。小カンテが終るとき、又明瞭な草付ハンドが横切してあり、これを右にトラバースして、正面ハング帶の上部に出る。正面の狭い凹角の中に

四ピッチ目、クラックの左手前にアブミを吊り、吉野君が僕と身体を入れ交って、そのまま出する道路を歩っているのだろう、丸山の頂上でブルドーザーが動き回っている。この山も削ぎていつかは消えてしまう運命だが、残念だと思

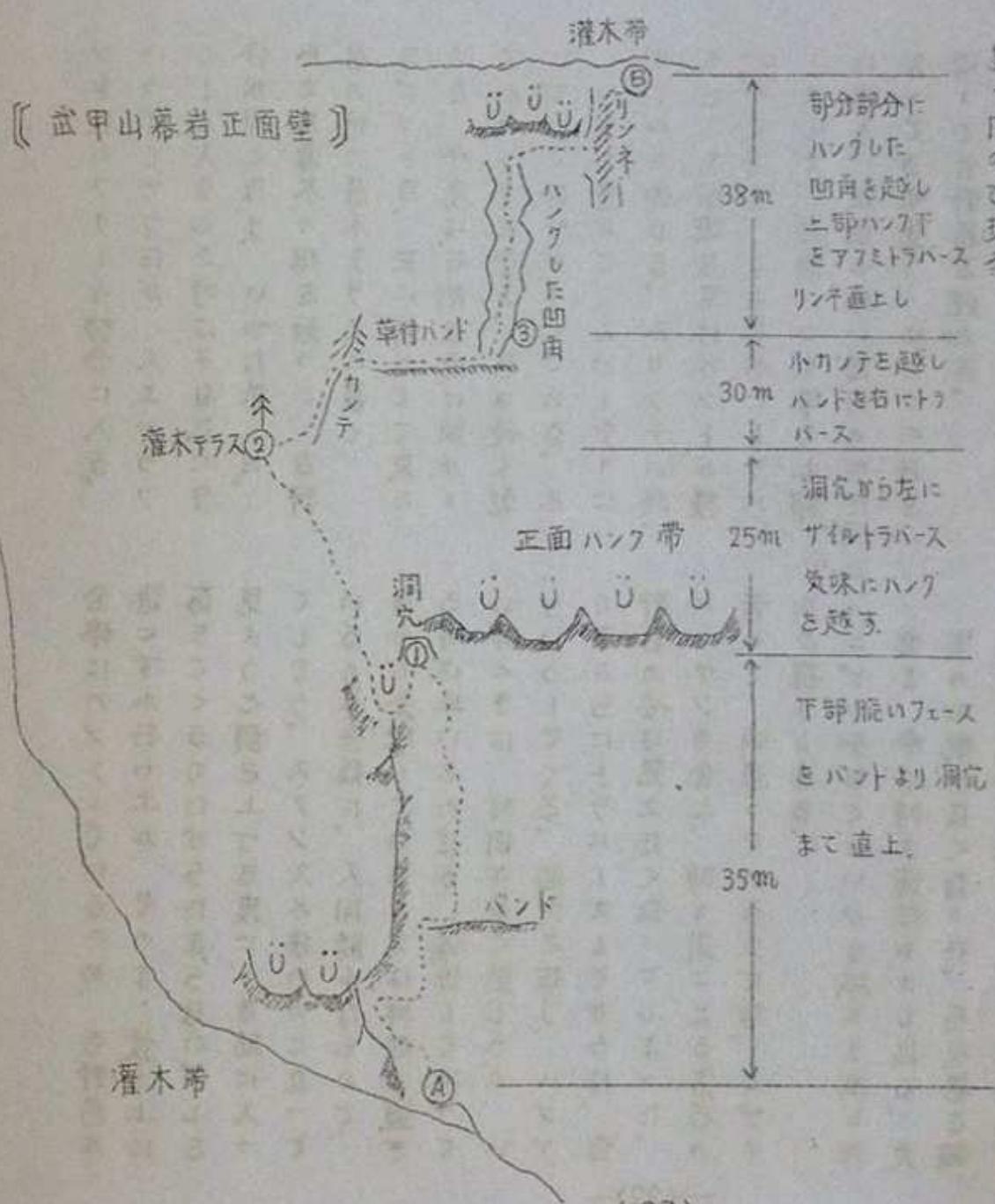
語にす小石や土が、そのまゝ僕の上に落ちてくるのだからまらない。上を見ようと顔を上げる度に、首筋に入つてしまふ。スタンスが怪いのご立て、いるのが苦痛だ。人間勝手なもので、自分を登攀しているときは時間の過ぎるのは早いものだが、確保して待つてからうしてくる。凹角を振り、ハングの下を右にトラバースしてからは、吉野君の姿は見えなくなってしまった。ハーレンの音ごと、時々聞こえる落石の音ごと、頑張っているのでは、ヒヅイルを握りしめる。

ニピッチ目ぐらういから抜かり出した雪も、今は時々薄日がさし出し、天氣の心配はなくはない。石灰岩を搬出する道路を歩いているのだろう、丸山の頂上でブルドーザーが動き回っている。この山も削ぎていつかは消えてしまう運命だが、残念だと思

うのは僕だけはあるまい。

ついたしの声かかう。アブミ確保していなくて、そのま直上して凹角に入る。大きいガツナリしてホールドなので気楽に登れる。部分にハングしており、アブミのが替えて登っていったか、ついでかりしてファイファイに絡んでいた紐がほどけて、アブミを一箇落しこしまった。それからかハングの箇所が多かった。ようやく凹角、強引な腕刀登攀になっこしまい登り終えて休みたい。ようやく凹角を抜けは、としたら、又ハング下のスラブ状のフェースを右にトラハースせねばならない。アブミ一コごはビうしょもほい。止むを得ず、セルフヒレー用のゼルフストザイルをアブミ代りにし、吊上げ氣味にザイルを張つてもらつてトラバースを始める。トラバースが終ると脆い岩溶出しに中と、浮石に注意して慎重に3mほど直上するとフッショウの中

に足ひ込み、登攀終了である。吉野君の笑顔に迎えられ、さく忱てうれ皿にしんに手て、完登り握手を喜びを分ちあふ匂のである。



一人の山旅四題

山縣昌彦

私は自分を単独行者と自負するつもりはないし、また、氣の合った仲間同志の山行は樂しさや、パーティの力でこそ、そこそこ登山の意義も十分承知しているつもりである。

しかし、心の中にいつまでも強い印象を留めている登山と、ふり返ってみると、單独行の場合が多いのもまた事実である。それは一人であるだけに準備の段階から下山まで格別緊張を強いられるためであろうし、一方、一人の氣楽さから、あらゆる人同關係から一時的にもせよ完全に解放されて、山に完全に融けこむことなどができるからであろう。

立ちふさがる岩壁や、冰雪の急斜面には、一人であるだけに余計恐怖心を感じるが、一方、残雪を払い除

りて跳ね上る木の枝に嬉々とした生命力を感じ、空とやく白い雲と無言の対話を交わしにぎござるのも、一人り時の方かより深いものがある

のではなかろうか。

ところで最近の私の単独行は、半ばは自ら好んで、半ばは同行者がなかなか得られないことによるようだ。若い人達の間では、人気のないヤフ山を歩くより、岩にじりつべ方が流行のようだし、四十を越した御老体の相手では、比較遠ざれるのも無理はないかも知れない。

岩から遠去かつた最近の私を、人にはあるいはムート派と呼ぶかも知れない。しかし山の哀さというよりも広く、そして深いものだ。何處の岩場のルートを云々という勇ましい記事に満ちた会報に、たまにはこうい

近頃の一人の山旅がいくつか抜き書きしてみることにする。

(その一) 四月の北岳吊尾根

42年4月4日

前年の春休にも一人で試みたが、悪天候のため、八本筋り手前で退却した。今年も天気図の具合は芳しくないが、春休も終りに直付き、まだ出かけたのに、乗り定、深沢下降裏で他の三人パーティと共に車を降りた頃から雨が降り始め、野呂川を渡る頃から雨は一矢激しく、池山の尾根に出る頃からは、凍つた残雪の上と滝のように水が流れ、靴の中までくしづぬれになる。

昼前に雪舟を前にした北山小屋に着いたが、二人のパーティが沈殿していた。小屋の床下は小川のようにな水が流れ、焚火どころではない。まことに満ちた会報に、たまにはこうい

られる。軽量化のため小型アルコールコンロとローソクしか持つて来てない。走半まで懸命にローソクの火で靴と靴下をあぶり、シュラーフの中へ抱いて寐た。夕方から雨は雪に変り、強風にあわてて屋根の煙出しぶから粧雪が吹き込む。

翌朝、雪はほど止んだらしいが風はまだ収まらない。昨日の沈殿沮は三時頃出発、こぢらは四時半に小屋を出る。例々急な樹林帯を抜り、森林限界に出る。砂礫いゝ広い雪面にかゝるご風当たりは一段と激しく、ケルンの蔭で一休みする。この風で八本歯が趙せるだろうか、一株の不安を感じる。ともかく行ける所まで道もう。八本歯に入り、東に雪と岩の稜線を横目に登り下りして進む。眼下側の積み雪は不安定でいやうしい。サイルパートナーの欲しい所だ。周もほく先輩の二人組が引き返して来た。風の為に頂上直下、折腰が悪いとのこと、緊張の連続のうちにいつしか八本歯

を通過。雪煙の合間に北岳が時に威圧的な姿を現す。岩稜の左手の斜面を登る。昨日の雨が寒氣で凍つたのである。テラヘルツの無気味な音をまじい雪煙を吹き上げて、渦をまいここちう側の斜面を乱舞する。

正直なところ、私一人の安全限界はこゝいらであつた。いさぎよく引き返す。

登山には最後には賭けの要素があるのではなかろうか。100%の安全圏で登るというのは理想には違ひないが現実にはあり得まい。仮りに個人にヒット80%の安全度を、よきパーティを組むことによつてその安全性を90%にも95%にも高めてその危険を乗り越えてやくところにパーティの意義があるのであろう。幸運の、しかも賭ける若さから遠去かつた私には、自ら判断する安全限界で引き退くより仕方がない。そう言い聞かせながら、今回も山頂を踏まずに引き返したのであった。飛ひかうガス

の切れ目から見えたパットレスは、真白な雪と鎧をまとつて見事であった。

(その二) 卷機山より白毛門山縦走

42年5月13日

六日町からバスの終点清水部落で下りたのは私一人。部落から新緑の林を抜けると、残雪をまとつた巻機連峰が朝の澄んで空にくつきりと浮かび上がる。

数年前に通つた割引沢のルートを左に見送り、檜窓の段の尾根にとりつく。下部では石楠花、こぶしが満開。向もなく残雪で夏道は分らなくなつた。しかし天気は良いし、勝手知りたるなつかしい山。氣は森である。はるべく石手糸子沢よりに樹林の中を進うように登る。

時々雪に押さえつけられた灌木の枝や笹が、ザザソヒ雪とはゆの丁て春の陽光の中に跳り出て身震いする。雪深い山にも春の息吹が充満している。偽巻機を回り込んで一

と下りすると、本峰の雪の天斜面を

に戻る。

バックに避難小屋が二階に雪面に顔を出している。中にもくりこんで見ると二階は快適、ソニルトで今日中に設走路を進めておく予定であったが、これ程の小屋を利用しない手はあるまいと、今夜泊りは此処に決め、昼食だけ持つて明日のルートの偵察に出かける。無風快晴。紺碧の空に純白の山、清淨の世界である。山頂に立つと正面に魚沼三山が

のんびり午睡を楽しむせいかまた夜の冷えこみに巨根のトタン板が収縮しこ時々異様な音を立てるいいか、ながらく寐つかれなかった。

翌朝、薄明の中を出発、昨日偵察したルートを辿り自指す設走路に立つ。あとは大体左側の雪堤を快調に進む。左手に至仏、会津駒等が朝の光を貸しシルエットで浮かび上る。

設走路中最長の福沢岳も意外に容易に越える。途中薄々雪面が切れ断層となり、瓦礫筋やアーチ構造は、いられる。次いで金山の南側は、雪が消えぬれば池塘でも残りでうねる。

ふり返れば朝日岳(笠ヶ岳)への稜線、トマツ林山頂から一気に下りし

たトーム状のトドマツの樹林帯は雪が深くて歩きにくそうだ。それで山頂からの帰途はブリセードで木子沢に一度下り、斜めに雪面上を回う側の設走路に出るルートを偵察、小屋

では、お朝采みの朝日岳に出る。予定通りす。こ早く、まだ昼前である。長年より念願の一つであつたこのコースもやつてみれば意外に簡単に相手が取れずさう程である。雪の状況一時晴れと天候の狙いも適中、私にこの手抜けする程であつた。雪の状況一時晴れと天候の狙いも適中、私にこの手抜けする程であつた。

〈5月14日〉
六日町 6:00 着
津川 6:45 着
創引谷分岐 7:25
巻機避難小屋 10:30

〈5月14日〉
避難小屋 4:40
木子沢山 5:50
柄沢山 6:50
猪倉山 8:30
太馬鹿子山 9:45
地蔵頭 10:20
朝日岳 11:05~11:35
白石山 12:50
土合 14:40

幕営可能地帯と思われる。
檜倉山附近は特にヤブがひじく、石楠花の混生地で強烈なヤブと格闘を強いられ、抜り抜いてみたら、スバツツが片方無くなっていた。

最後のヒーフ地蔵頭から一時に

93年2月27日

二、十年近くスキーを履くのは
年に一、二回、半壁山群等にツアーや
に出でたりるくらいに、いわゆるスキ
ー場なるものは、それにもかからず、
全くだけで販易し、ましく棒すり、
股運動を以て車の手とする技術には
、やれオーストリートンがフランス派
とのテモニストレーナーの場に
化したケレンヌには、じつもおかず
の�试はよい。

今回は東京からスキー一行にて
ある。前年秋から雪玉回合に山登り
ありへらむれ、更に野営場で半年は
かり山から離れた。ひこにのむが、
春々近付く共に、よくや諦め抗し
難く、身体の調整ばかり勝手は理屈
をつけて、あ頃は山歩きと組み、こら
にのむが、ほくほく甲府、万葉、
今年は大雪にどの便りが届き、十数
年前に訪れた入笠山のふり出づる

たわけである。天気望しごとく、早速そ
暖をとることなくにきてある。

音駅下車、駅の周りに既に積雪70cm
程度、しかもここほくも笑ひ、皆ソラ更、
町並にせし戸惑いはから、スキーの道
にて町並み坂道、雪水池を先てむすみ
山道に入る。積雪50cm、快晴の日射に行
はみはから、林間の徑を走り、一時西余
り登りに見晴茶屋、そこでお花茶屋（い
ずれも原人）を過ぎ、三時回程の通行手
のこう高原峠の所へ出る。自動車道跡
の道に出て登る（坂井はバスが入り
ないこと、あ、何とい、お困りだことと
）、しかしカラ松の林に伸びから登る
止へずまい、初春の陽はあくせむから
、おこりぬ。四つ

"He was a mountaineer of old school,"
"He enjoyed a fine climb with
all his hearts, but seemed equally happy
on a quiet day."

2) 隆、ヒンクリフの娘の夫の同姓
の男の娘。

者より面紗を拂は、五年ほど前に入
り、本にうちなまつは園亭の庭
の仕事をする事の未だ。このま
でかがいりソラノサカヤチのま
に竹ガストラックの通し、「は
「なしハスナリタマトロム」にさし
くわせた。ヨリモウは見ぐの
間が静くなり、アーヴィングのうら
バトはその身を止めた。この
より、山の音が静かに聞こえ
るの間にむかう。三十名ほど
から八九百、祖父、孫の六〇段
の階梯四十台に攀つていた。
いそくスキー降陸に附る。
詰め脱けいのひ等で、都合は
間に重めあむるうちに鳥の羽めりり
取る。十分度下りて木屋に来る。
弊さんにはやめらば、カラ松林
坂道、うねる崖、兎廻し茶屋

(その四) 日光白根山より庚申山越走

43年5月31日～6月2日

へと滑降を楽しむ。余り天気に一
氣に下るのも惜しく、戸を閉めし
見晴茶屋のベンチで、正面のハケ岳
を展望を樂しみながら、アルコール
コンロでお湯を沸かし、持参の菓子
飲む。(ウイスキーをらいりちびりと
言いたいところだが、胃の薬には我
ながら色気がない)。

雪張り、背もあた、もう、山の春
見晴小屋から、入笠小屋を経て、
下通り右の道へ入る。登って来た
は丁度良いコースである。滑降を続
け、最後は神戸という部落まで下り
、ストンと急に雪が切れると、ここ
は自動車で行きかう国道20号線、駄
みてはあこ一役足であった。

前から組っていたコースである。
白根並辺は冬何回も行つたが、鍋ヶ
岳がう元は踏跡もなく、行く機会も
なく過ぎるうちに、猪不尋岳連が数
年がかりで炭坑跡を切り開き、41年
9月、炭坑跡完成記念登山に招待さ
れて庚申山荘に入つた。あいにく
の園芸模断が台風で、山荘も一時行
危険状態に陥る始末、庚申山に登
れたりであった。

その後縦走路は荒れ正まつて入る
登山者も稀のことごとく、つい長
ところ、金豚の牛馬から土、日に積
み到來、早速出かけた。

日光邊元から白根沢の雪渓を登り

途中から尾根の夏道にて入て又向平に
出、箭白根手前で幕喰するつもりで
いたが、日が長いので足を伸ばして
箭白根を越え、薄暮の中を五色沼の
壁難小屋まで下る。周囲は一面の雪、
三日月が浮かび、夜は意外に冷えこ
た。

翌朝再び積雪に戻り、朝々にある
黄に赤の小さほ板片の標識を頼りに
雪の樹林帯を進む。しげしばれーー
は不明瞭になるが、雪のためか、
て歩き易く、物を進んで行くと、ヒ
ヨフコリ標識が見つかる。二つ異なる
て、三所崩落で鍋ヶ岳山頂に辛く、
方じごくなり始める。こ、からて内
に左折し南下する尾根に入るのにか
詰詰木介らず、マブをこいで入る。ま
るる峠へ(御坂か?)。の通説の力しき
回りこむようにして、ようやく白根
す尾根を上に出た。本筋行の津波の
滑走するところである。

青柳	6.00	発
見晴茶屋	7.25	
お花茶屋	8.20	
鐘打平	9.00	
入笠小屋	9.10～9.30	
入笠山	10.05～10.25	
入笠小屋	10.35～11.15	
神戸	12.50	
青柳駅	13.15	

い、幸い好天なりと、宿室坊、三保山に先の尾根が見えるて氣は樂だ。笹ヤブは雪に押さえつけられていて後のせいもあるうか、殆んど完全に踏跡をお、い隠し、足に感しる僅がほ枯枝の道いで踏跡の届ゆと刈り、ヤフの根元をかき分けて見て、古い切り跡を研がめにりし所から、ほむんど九一日、笹ヤブこそが隠く。ヤブも道なりレとはいつもの、いさ、が閉口。三保山を越え、ようやく現れて来た松ノ木沢支流源型の奇岩を俯観しながら、出発後1時間で地図169ルピーケを越え、急にヤブから開放され、開けた砂地の鞍部に着いた時は、全く助かれた、という氣持であった。実際今迄のヤフが嘘のよう別天地、しかも左手を少し下してみると水流が出ており、絶好的の幕営地である。たゞ、あたりに何やら獸の足跡があるのか気になつたが、見てははさせうだ。早速幕営、静か

夜中にケーン、ヒュウ鋭い鳴声に目を覚ます。何やうん音、更に数回鳴き聞く。正体は介はないが、能らしい、う音節でも、ケーン、ヒュウ、くらい、正しくいは少しこも人間体より強い奴ではさまいじ、ソリ、そらまた風、てしょ、ト

翌朝、四時半出発、一ツ、二つと越えると田原平に出た。松木沢クリコリ小屋への下降渠もあり、落葉の跡もあり、今迄よりいくつか人間臭くなる。

それでモロヘヤ山の登りにかかるまでは、まだ笹ヤブが隠く、頂上近くには僅かながら残雪が見られ、六時半、樹林に囲まれた山頂へと着く。木立の間から今回りコース最後の錦と庚申の尾根が望まれる。倒木が多い道を一時同余で錦岳のヒュウに着く、ここ湯元を出発して以降初めての登山者に会う。

中山莊に着く。

親爺さんと台風の時の匂い出話を

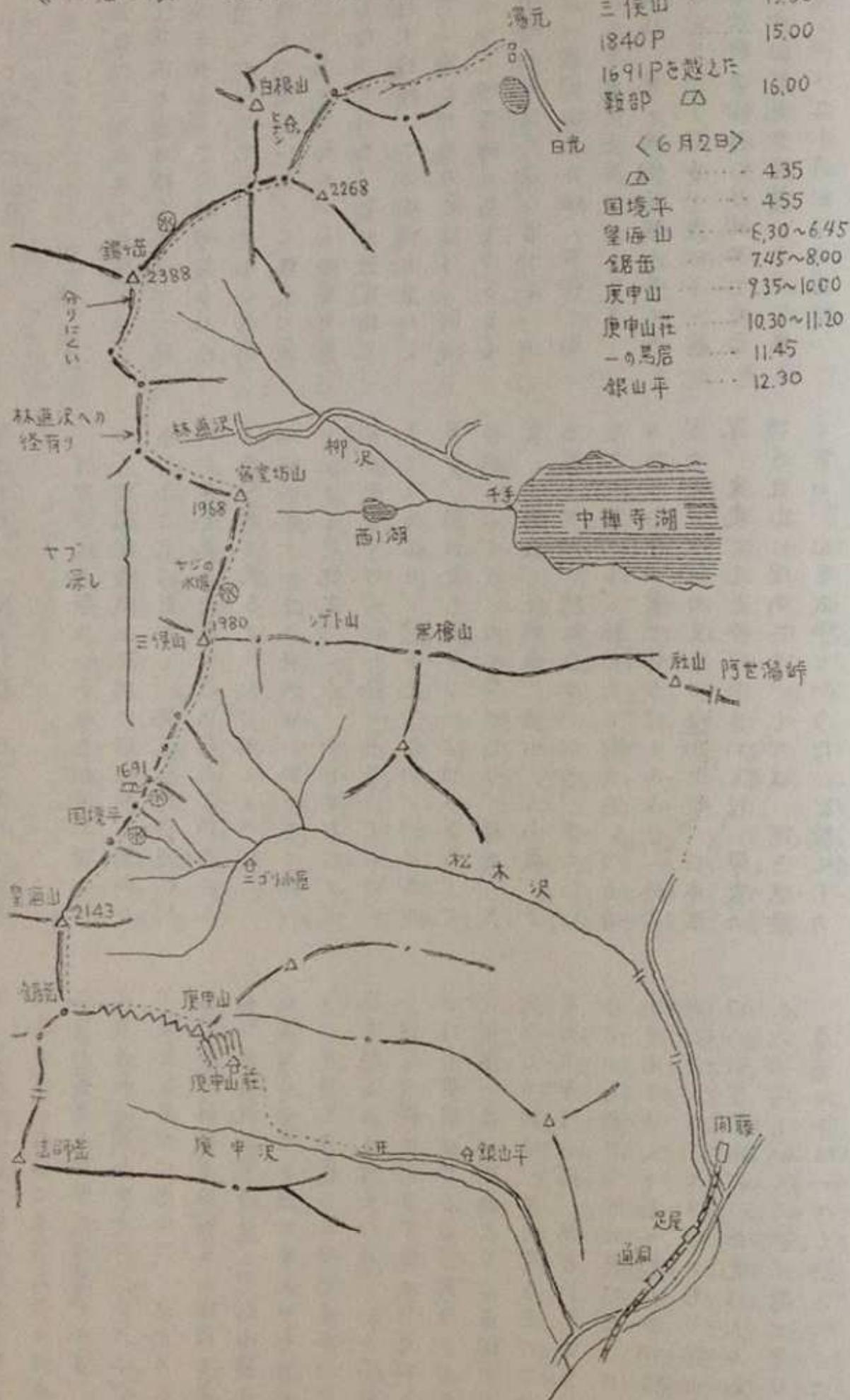
したうして懐かされ、コ・スの休憩もいう、同ガルに。今年の休憩は梅が最初にうどのことある。山平り近く通りが、ト車に走せて山平り近く通りが、ト車に走せてもうい、予定より早く足尾線に度々こじがてきた。長年の宿題の一つを果たした満足感に心を充たされた私は乗せて、足尾線の列車ほのんびりヒ渡良瀬川に沿つて走って行った。

（5月31日）

大宮	11.06
湯元	16.00
前白根山	17.30
白根ヒナツ	
小屋	18.10

（6月1日）
ヒカル屋 4.55
錦ヶ岳 7.40
2077P 9.10
林道入口 10.15
宿堂坊山 11.00
マシカ水場 12.10
～12.35

《日光白根～庚申山縦走路》



武甲山

—その頂と山麓—

石川謹明

海拔一三三六木の武甲山は、秩父市内からの標高差は一一〇メートル有し、その特徴ある山容は遠くからもすぐそれと分り、秩父の住民にとて秩父の象徴もあり、セメント産業の基盤にもなっている。全山石灰岩で現れ大規模にその採掘が進んでしまっていている。山上からは、天竜、赤城、男体、両神山、甲武信岳等の山、一方、赤久羅、東・西御荷鉢山等の西上州、笠山、双子（東双子）等の県境越え山などが眺められる。これが山を見る位置によくて異なり、例へば小持山への途中シラシ窓付近からは丸々こじした形に、秩父市内からは扇を開い

たように、更に矢岳山稜の一角、深戸山附近からは、優美に整つた三角形に見える。

江戸時代末期のいわゆる新風土記の一つ、新編武蔵风土記稿に興味ある素内があるがこれは別愛し、修道社刊行現代紀行文学全集山岳篇に収められている二人の文学者の文を二、三引用しよう。

「明治三十一年八月六日、知々夫力郡へ

と心さして立出づ。……やがて立出ごと南と向きて行くに、路にあにりて、いじ大きほる山の、頭を压する如く峙てゐるか

見ゆ。向はてし武甲山とは知らるるまで安堵をしくすくれて秀てたり。横筋、大宮、上杉森、下杉森、浦山、上名栗、下名栗り七村に跨れるといふ。まことに名栗り七村に跨れるといふ。左もあるへし。此山のこぼえをいつの頃からか武甲山と書きほらはしより、終に國の名の武藏の文字と通わせて、日本武等東夷とも平げたまいて後、甲冑の頭を此山に埋めたまいかは、国と武藏と言ひ、山を武甲といふなど説くものであるに至れり。説のいつわりほるべきは誰しも知る所はんど、山の頂に日本武等

をいつこまつりありほんほとすろまま、ほお或は然らんと思つ人もほざにあらず。されど文字も古くは武光にのみ書きて武甲とは書かねば、強

に言せのより所を失へば、いふべし。さてたゞせかに思ふに、武光のことは最も甚に故無きに似て地理の書はこにも其說を欠けり。けだし疑ふりくは、こゝらを領せし人々に必ずり、たゞ九十九庄、三ツ毛山兵この林立起りたるならんか。いじ古くより秩父の郡に拠りて宋えたら再り究にけ、其初めてここに来にりし丹波比武信、また初めてここに領せし武

経などの如く、武の字を名につけて名の多ければ、あるいは武光といふものもありしかと思はる。たゞし心地り名より人々名の起れる例は多くぬど、人の名より地名の起れる例はいじツづれば、武光は人々名より心地り考もいこ力無しほど思ひつ、桑園の中、一すじ跡を行くに、桑园もまた乾かぬ桑の葉り上吹く朝風いと涼しく、山地よせこひの子がり

註

今年（大正四年？）夏、武甲山に登つた。

隣まで少しも平らな地上を見ない。

すと連なり立てる中に、三峰は少しく依く黒みで見ゆ。それより東の方、甲斐境信濃境の高き嶺々連なり皆にて天の末とは限りたるは雁坂、十文字ほど名さえすさまじく呼ぶものなるべし。……

（幸田露伴「知々天紀行」）

「武甲山は、武藏の一名山である。其の山、秩父連山の入口に当たり、しかも山安高峯、後に秩父連山の駒を抜き、遠く武藏野平野から望んでも、武甲山だけはいちじるしく天柱にそびえである。武甲山よりニ里ばかり奥に三峰山がある。三峰神社の信仰者は多く登山するが、武甲山の方は近いにか、わらず、信仰のこもほわほい山だが、もう取多に登山するものではない、武藏風土記その他古書に、武藏の名山なりとある一語に心を動かされた私は、Mや、丁度こどもに

カタ馬車に乗りて渡った頃から、やれり前進を仄するようは雄大な山の姿は向ほすと知れた武甲山。なるほど武蔵の名山であると心おどせながら秩父入宮の町に着いた。町はずれりあやしげなうこん屋に入つて登山の仕度をし、秩父街道を歩き行つて、上影森村の道が左へ向道を振りること、いよいよ山麓の樹立道は、つまさき上りとなり、色の良いほどしこの咲いている草原の中に、武甲山入口の跡、大きな石がある。……倒木の太い幹を好みこそ、通い草りで分り、辛うして武甲山の混頂に達したときには、天地ぐらぐらにして、いまにも太古から動かれてゐる大きな音の波の上に漂ひたれそうに思つた。ふしき山の上に世界

秋父地方には故多く伝説があるが、武甲山及び山麓にもいくつかの伝説が語りつがれている。

通称羊山の近くにある安の池（武甲山の混頂に達したときには、天地ぐらぐらにして、いまにも太古から動かれてゐる大きな音の波の上に漂ひたれそうに思つた。ふしき山の上に世界）

地平線が水平線しか見えぬれば、常に映るのみ全くの曲線が世界で、農業はあるても只一つの蒼い色の曲線が重なりあり、延びあい、傾き下から天

手入れされていはないので少々歩きに

くいが、昨今にきやいを見せる武

甲山にあって、静かに展望に恵ま

てあり、好きほコースである。所要

時間は下ノ丸山へり介岐吳から空峰

まで約一時間、途中カラ松沢を渡る

所に野老の葉山岳会り枯らした導標か

ある。こり先五分位の所にあるコア

状カ一本の切株を有するピークは、

秩父市内及び横瀬村を一望のものに

見下ろし、幕岩のせり立つのが眺

められる。空峰から山頂へは約一時

間を要する。

太宮附近や川越深沿線 あるいは

都内からし武甲山は見えうか、秩父

盆地に入つた電車の車窓から見るじ

始めて故郷へ帰つたにいづ実感が

湧く。いつの日いかの山谷も変貌

するであろう一現に一日一日と削ら

れてゆく武甲山に、一日も長く幸あ

れと祈りすにはいられないのである

II 隆想 II

うんふの火

石川 譲朗

私は日光市細尾で生まれた。ここは細尾峠の入口であり、近くには男体山がある。五才がら秩父市野坂で過ごした。こゝは武甲山登山口である。遠く奥秩父の山好みが望見できる。常に山を見ながら成長したのだ

が、山登りと始めになり遅かったのは、余りにも山が近くにあったから

であろう。

標題は尾上柴舟の歌集「永日」に次の歌から引用した。

らんぶの火 兔の耳のようなるに
・思いぞいつる 若き日の山

○ 水筒

手もとに古ぼけた一コの水筒がある。こり代物は帝国海軍陸戦隊用の水筒で、生き

残した叔父の手に残っていたものを

、山登りを始めた頃、叔父にねだつて譲つてもらつたものである。以来

奥武蔵から標高まで、山行のお供に

ナックの片隅に入れて持ち歩いてい

る。数年前、正月を雁坂小屋で迎え

である。わらしは足に履き、すかりは背に負う。すかりは山仕事に、わらしは谷歩きに使われる。都会の文

明は山村にも波及し、現在すかりやわらしき編める人が少なく残つてい

るのは事実である。その中にあって人々は父祖伝來の土地を守り、そこ

に骨を埋めてゆく。されば宿命でもあろうが。

雪降りて けふとも知らぬ奥山に
炭やく翁 あはれはかなみ

金穂集より 原実朝

た時には、ザワクの中に入れておいたのに、中が凍つてしまつて困つたことがある。だが、冬期以外は大抵この氷筒で間に合う。ホリタンはじつも臭くて好きにはれない。

日本の山では、まずどこごとも氷筒あたりは危いが）流れの水を飲むことができる。水ううまさては日本は世界のどこよりもひつけとうないであろう。

「大きはやかんと 空のまんほかまで持ち上げて じっくん こつくん木とのむ じっくん と、くんヒッくん じっくん のごがほ、て によろ によろ つめたい水が カビから むねがう胃袋へ入る……もういっぽいもうひと息 ヒッくん と、くんヒッくん どうしてこんなに 水はうまいもんかなあ

詩集「山芋」より「水」大岡松三郎

今雨じ私はこのふるさとの山に居る。正丸峰をふり出しに妻坂峠を登

○ふるさとの山

少年の頃である。雪をいたゞいて山に、せいに（方言で背板、背負子のこと）をしよ、て一人で出かけ行つた。以前近所の小母さん達と何回か新学期に行つた所を目指して

・ズツク靴は雪に埋り、白い息をはきながら黙々と登つて行つた。人恋しくは、たゞ、上方から犬を連れ

何羽かの獲物を脇に下丁した猟師に行

き会つた。二言三言言葉を交した後、氣をつけて行けよと言つて猟師は下つて行つた。岩の露出した所を通り、登りついに前は、以前とは林子が遠つて、岩の上には雪が積り、持参した鉈は役に立ちそうにもなかつた。

途方に暮れて再び雪に足をとられながら、淋しさに泣きながら山道と下つて行つた。

て、この思い出す頃近くに着いたのは春深い日の夕暮であった。残照は

最後の淡い光を投げかけ、音風で倒壊した昔の社は修業され固く圍ざれていた。学生時代の最後の思い出にこの頃を踏んだ仲間達も、ほん

どは家庭を持ち、営業をした田んばはつぶされ、七夕の竹を流した小

川も水が涸れかかっている。

自然は輪廻をくり返し、小さほ人間はその中で土に生き上に還つて行く。日も沈み入り、前を下る友は快調に飛ばして行く。日光、上越の山は雲に包まれ、荒川の流も姿を隠さうとしている。疲れた身体は、時に少年の日のようになに足をとらなかった。振り返るに山は黒々と闇に横にわつていて、

牧々は燈の暖かい灯を目指して歩き続つた。

「ふるさとの山に向ひて 言う二
とほし ふるさとの山は あり
かたさかな」『一燈の砂』より

(43年12月まで)

(一) あゆむ山の会白毛円遭難の件

43年2月25日、白毛円山を登頂し

下山中のあゆむ会員4名（佐藤祐、大島哲郎、熊谷深、板橋秀吉

君）のパーティは、山頂主稜の取付

表付近で、幅100m、長さ約1kmの新

雪表尾雪崩により白毛円沢に流され

、佐藤氏を除く3名は這い出され、

佐藤氏は行方不明、3名は積雪まで

登り、雪洞を作り一夜を過ごすも、

26日大島氏雪洞にて死亡。他の2名

は下山連絡。市岳連も連絡を受けて

直ちに遭難本部設置。27日0時45分

オ一次救援隊出発。大島氏遺体収容

・佐藤氏は行方不明のまゝ、あゆむ

山の会・市岳連各会、及び東電山岳

会等の協力のもとに数次の捜索をく

り返し、（現地入山者延べ215名）、

4月21日は65名の合同捜索を行った

が発見できず、遂に同29日、前回の

ゾンデ捜索地より100m下部にて、

祐君の兄さんににより発見され、5

月1日合同收容隊により收容。5

月4日佐藤氏宅にて告別式が行は

われた。

本会より菅野・辻・牧野・清水

・中田・今井・鈴木孝・山崎（本部

）との他が協力。

遭難原因としてあゆむ会の報告書

では、悪天候下の行動、積雪情況を

考慮しなかつたルート判断の誤り、

ツエルト不携行、雪洞での処置の不

十分等をあげているが、我が会にし

ても、故人の冥福を祈ると共に、各

人が一矢心を引きしめ、リーダー会

も行動計画の慎重を今まで以上に各

人にうながして事故の絶滅を期さぬ

ばほらぬ。

なお今回感じたのは浦和市岳連加

盟各会の連帯感の強さである。救援

対策はさすく（うまく行えたと思う

が、肝心なことは事故を起こさぬこ

とである。そのための各会の遭難防

止対策の強化が望まれる次第である。

(二) 市岳連遭難対策訓練

43年6月23日、飯能市天観山の岩

場で、岩場における事故者の救出法

を中心に行なった。

本会より牧野・菅野・山崎・吉

野・吉田・木田が参加。

(三) 市岳連登山祭

43年10月20日、丹沢水無川にて、

石川・佐藤・鈴木・吉田・吉野・山

沢参加。

もう少し実のある（登山として）

ものにしてもらいたいという要望が

本会としては出した。

(四) 市民ハイキング

43年11月10日、前夜発のバスで大

菩薩峠へ。

本会より、山崎・吉田・吉野が役

員として、他に牧野等が参加。

天候にも恵まれ、まずく成功

てあつた。



上延はしたら拾収がつかなくなるので、今迄集まつた原稿たりて一発出したといつところである。

次号は44年の冬合宿から夏の合宿くわいまでまとめ、会計報告等り会務報告などものせて、この秋にても出しにいと思つこいる。

会報の使命の一なか会員の山行の記録の発表にあるものとすれば、余りにも会報の発行が足れるといふことは、古新聞と同じくその価値がほくほくと共に、眞面目に原稿を提出してくれた会員に對して申証したいことにもなる。

二の会報の内容は前号

に引続き、一年遅れ、昨年夏の夏頃までの分であり、しかも春の合宿などの原稿が未挿入のため、いわば個人的山行の記録ほどに偏ってしまった。

正直に言つて、これ以

きにエヘレストのナクスコルからスキーで滑降するとか、登山という行為は一体何ほのか、人生にうものほのか、考えざるを得ない昨今である。

遠い将来とは長い、たゞ之全員が参加しないにしても、全員の裁刀を結集して、会としての遠征を目指さうではないか。

会には会のカラーやいうものがある、組織の一員である以上は、組織に対する責任も義務もある。各人が勝手なことを決して両立できないものではない（必要であろう）。

（山彦）

会員の山行一覽表ものせるつもりであったが、余りにも膨大になるので割愛した。實に皆良く山へ出かけてゐるもので、大いに結構である。

もつヒマラヤも、そう

溪 疆 オ 18 号

発行日 昭和44年8月10日

発行者 埼玉県浦和市領家一一五

山縣昌彦方、浦和溪稟山岳会
(代表) 山 總 昌彦

